



ONIGIRI ス
In @ Sweets 3



girl
meet
BOY!

夢
涼



それで、

どうして隠してるのか
話してくれない？

ゆ、夢子ちゃん？
ちよっと落ち着いてよ…。
は、話すから

ええと…

絆創膏で…
前張り…してて…

へえ…そうだったんだ。

じゃ…

おちんちん…

大きくなったら
大変なことにな
るんだよね？

え？

ほいつ！

きゅわわわわわーや、夢子ちゃんー！

ぷんぽん



アソコが…苦しい…



アソコってどこのの？

詳しく話してくれないと、
わからないよ？



だから…ちゃんと
言ってくれないと…

ゆ、

夢子ちゃん…ずるい…



おちんちん…

なに？よく聞こえないよ？

おちんちんが…苦しい…

それで、

ペロペロはいいの？





なに…どうしようかな…?



お願い…

夢子ちゃん…前張りはかして…



うう…

恥ずかしいな…

へえ…

こうなっていたんだ。



はうっ！



それじゃ…
穿かすよ…



きやっ！



夢子ちゃん…
そんなに触ったら…

はうっ…



思ったより大きいわね

ふーん…



それじゃ、

涼のおちんちんを小さく
するために抜いてあげるね



こんなに立ってしまったら、水着着れないよね?



あぁっ……

もう、
だめ……

出ちやう……。



きゃっー



かわいい顔して
こんなものついているなんて……
涼って本当に変態だね。

うっ

はっ

しゅっ

しゅっ



これはお仕置きが必要だね



私の顔を汚すなんて...



ごごめん...夢子ちゃん...



ほら...入れるよ?

ヒッ

このポーズは恥ずかしいよ...はづっ...



ゆ、夢子ちゃん...

じっとしてれば
痛くないようにするから。

黙ってて。

はづっ...

ピンッ

ゆ、

夢子ちゃん…これは…？

ほら、まだ元気になったわ。

私の特製のキャンディよ。
これでまだピンピンになれるわ

またかわいがってあげる。









涼だけ気持ちいいこと
したんでしょ?

いや、
まだだよ。



…もう、許して…

…夢子ちゃん



満足するまで今日は帰さないから…

だから、
今回は私を満足させて…

従姉弟同士の

「今年のアイドル大賞は秋月律子さんです！」
今年、一番活躍したアイドルに与えられる栄誉ある賞。その大賞の受賞者はすくなく聞き慣れている名前だった。

「やっぱり、律子姉ちゃんか賞貰ったんだ…すごいや…」

涼は自分の部屋で従姉(いとこ)である律子がテレビの中で大きな

トロフィーを手に持って涙汲んだ顔で笑っているのを見ていた。でも、涼の気分はどうも晴れなかった。同じアイドルとして従姉である律子の受賞に羨ましいと思う一方、年末なのに仕事もなく、テレビを見ながら暇を持て余している自分が情けなくも思われてきたのだ。

「はあ…」

涼ががっくりと肩を落としながらため息を漏らす。しかし涼はすぐにかけていたメガネの位置を正しながらテレビを凝視する。

テレビからは律子のスピーチが続いていた。

「まずはこの賞をファンのみなさん、高木社長やプロデューサーさん、765プロのみんなに捧げます。そして…」

律子は数え切れないほどのたくさんの方の名前を並べながら感謝の挨拶をしていた。その挨拶が終わって、マイクから離れようとしていた律子がふとなにかを思い出したようにふたたびマイクの前に立つ

「あ、そして、言い忘れましたが、みなさんにひとつお願いしたいことがあります。私のイトコの秋月涼ちゃんも今年、アイドルとしてデビューしているので応援よろしくお願いします！」

テレビから聞こえてきた律子の言葉に涼の瞳が濡れてきた。

「律子姉ちゃん…」

「それでは、秋月律子さんの歌を聞いてみましょう、MEMです！」

テレビの中の律子が自分のヒット曲を歌いだそうとしていた瞬間、ピンポンといきなり、家のチャイムが鳴った。

「誰だろ？父と母は今日は帰らないって言ってたんだけど…」

そういう考えしながらインターフォンについているカメラを確認した。

そして、カメラの前の人物を見た。あまりにもありえない人物が画面の中にいたせいで、もう一回、テレビのほうを見て、目をこしこし擦ってからもう一度カメラの画面を眺める。

画面の中では律子がいた。どうやらすくなく気持ちがいい様子で満面に笑

を浮かべながらドアの前に立っていた。そしてインターフォンのマイクから律子の声が聞こえてきた。

「涼、いるよね？早く開けてー」

「えええっ！すぐ開けるよちよと待ってて！」

慌ててドアを開けると律子がいきなり涼を抱きしめる。

「律子お姉ちゃん、いきなりなに…うわっ、酒臭い！」

「涼ちゃん、お姉ちゃんが来てくれたのに嬉しくない？」

「いやいや、それより、今、テレビに出ているんじゃない？」

テレビの中からは律子が華麗に踊りながら自分のヒット曲を歌っていた。

「あんた、バカじゃないの？あれは録画に決まっているじゃない」

「え？そうだったの？…」

「まだ、10代の私が今の時間で生放送に出演になると大問題だよ。」

涼、あんたもアイドルなんだからそれぐらいは知っておかないと困るわよ」

律子が苦笑いをしながら涼の頭をぐちゃぐちゃと乱暴に撫でる

「律子姉ちゃん、苦しいやめてよ」

一歩後に引いて律子の手から逃げる。涼がぐちゃになった髪型を正しながら

ら律子に聞いた。

「えっと、それで、今の時間になんでボクの家になんか？」

律子が一瞬、ちよつとだけ困った顔をしたが、すぐに微笑みを浮かべながら

ら答える。

「いや、実は録画後のお祝い会でちよつとだけ飲んじゃってさ」

「あ…さっきの酒臭はそれか…」

涼がやつと納得したような表情をする。

「大きい賞取ったから、家の前に記者さんがたくさんいるの。それでお酒飲

んでたことバレたら大変なことになるからちよつとこっちに逃げてきたわけ」

「…そうだったんだ。で、律子姉ちゃん、大丈夫？、酔ってない？」

心配そうな表情で聞いてくる涼を見ながら律子がこつと微笑みながら

答える。

「大丈夫、大丈夫、酔ってないよ」

律子のはつきりした発音やキリとした表情を見て涼が安心した顔をす

る。

「よかった。じゃ、今日は泊まってくの？」

「うん。そうさせてもらおうわ。もう、おじさんとおばさんに電話して許可

は貰ってるし」

「そうなんだ。じゃ、開いてる部屋勝手に使っていいよ。律子姉ちゃん疲れて

いるだろし、早く寝てよ。私はもうちよつとテレビ見てから自分の部屋で

寝るから…」

その時、律子が涼の言葉を遮る。

「あ、そうだ。涼にプレゼントもってきたんだ」

「え？プレゼント？」

「うん。貰ったから、まわりのみんなに感謝の意味でプレゼント配ることにしたんだ。涼の分もちゃんと買って来たんだよ」

律子がいつのまにかドアの前に置いていたバックからなにかを取り出した。「じゃーん！どうよ？かわいいでしょ？」

律子が手に持っているのはレースがいっぱい飾られているかわいいピンク色の下着セットだった。

「女の子なら見えないところまでちゃんとおしゃれにしまなきゃ！だからこれ涼にプレゼントにもってきたんだ」

律子のその言葉に涼の表情が見る見るかわる。

「ぎやおおおん！ボクは男の子だよー！」

「なに言ってるの、こんなにかわいい子が女の子なわけないじゃないか！そういつてる律子の顔はすでに上気して赤くなっている。表情もさっきとは違って完全に緩めていた。律子はへらへらと笑いながら涼のほうに迫ってくる。

「律子姉ちゃんにいつてるの！ってかやつぱり酔ってるじゃないか！」

涼は半泣きの表情で律子から逃げようとしたが、すぐに律子に手を捕まれる。そして、律子が悪魔的な笑いを浮かべながら涼の耳元にこっそりささやいた。

「さて、脱ごうか。涼」

その声に昔の記憶がよみがえる。そうだった。律子は普段はまわりから真面目な子もしくは優等生と呼ばれていたが、涼と二人きりになるといきなり豹変し涼をいじって楽しんでた。主に女の子の服を着せられたり、強制に化粧させたり、終いには妹がほしいとただをこねながら挟みをもって自分を追いかけたこともあったのだ。

…そのときは本当に女の子になるんじゃないかと思ってた。

「り、律子姉ちゃん、ちよつと落ち着こうよ！ねえ？」

「いや、ダメ。私、涼の下着姿みたいなんだもん。なんならお姉ちゃんが着させてあげようか？昔みたいに」

律子は密かに唇を緩めて笑う。それは昔の律子を思いさせる表情だった。涼に背筋が冷たくなるような感覚が襲う。

「わ、わかった。着、着るよ。それ見たら、寝ようね。ねえ？律子姉ちゃん」しかし、律子は冷たい笑いを浮かべさせたまま涼にこう告げる。

「1分あげる。1分内に着替えて来ないとお仕置きするわよ。わかった？じゃ、これからカウントするよ？60…59…」

あまりの恐怖に涼はさっさと律子から下着を渡されて自分の部屋に戻った。

部屋に戻った涼は改めて渡された下着を確認する。ピンク色でヒラヒラのレースがいっぱいについているかわいいデザインだった。女装してアイドルをはじめから女の子の下着を着たことは多々あるけど、ここまで女の子っぽいデザインは初めてだった。涼が下着を手に取ったまま戸惑っていると、外から律子の声が聞こえてきた。

「40…39…ほら、涼？どんどん時間なくなるよ？」

その声で涼が慌てて下着を着替え始める。ブラを着用して中に詰め物を入れてから、トランクスを脱ぐ。元々なら、ここでめがねの変わりにレンズを着用するのだが、しかし、外からは無情にも律子のカウントが続いている。そんなことをする余裕がなかった。そのまま一気にパンツを履いた。

「あうう、やつぱり、恥ずかしいよ…」

涼の大事なところがヒラヒラな下着の生地を擦れてしまう。なんとも言えない感覚に涼は自分の知らないうちに声を漏らしてしまった。

「あうあう…。やつぱり、変な気分だよ…」

「9…8…7…」

涼が戸惑っているにも関わらず、律子のカウントはいまだに続いている。しかも残り10秒を切っているのだ、今の律子なら本当に昔以上にひどいことをしてくるかも知れない。そういうことが頭をよぎって涼は急いで、律子が待っている居間に向かった。

「…2…1…」

「り、律子姉ちゃん！は、履いてきたよー！」

涼が慌てた表情で居間に到着するなり律子に向かって叫ぶ。

「時間内でちゃんと到着してるじゃない、お仕置きはナンにしてあげるよ」

「…よかった…」

涼がほつと胸を撫で下ろす。律子はそんな涼の様子を上から下まで値踏みするように眺める。

「…へえ、本当によく似合うわね…。メガネかけていても、男の子ってこと忘れそう。」

涼はその言葉にやっと今の状況に気づき慌てて両手を交差して胸元を隠す。顔を恥ずかしさのあまり、赤くなってしまっていた。

「り、律子姉ちゃん、あんまり眺めると…あの、恥ずかしいよ…」

「なに、言ってるの。ほめてるじゃない。もっと自信持っていいよ」

「男として下着姿を褒められてもぜんぜんうれしくないよ…」

涼が半泣きの表情でそんなことを言っている、いきなり律子が自分の服を脱ぎだした。あつというまに下着姿になった律子が涼に抱きつく。

「姉ちゃんのいうことをよく聞いたからご褒美をあげる」

「あ、あわわわ…律子姉ちゃん、なにしているの？」

律子が涼の頭の後ろに手を回して自分の胸に強引に抱き寄せる。律子の胸に顔を埋められた。律子はそのまま涼の頭を両手でかっちり固定して逃げられないようにしている。

「これが、ご褒美、どう？うれいしょ？」

涼はなんとか抵抗してみようとしたが、律子の体から漂う甘い香りに全身から力が抜ける。

（ちよつと…苦しいけど、律子姉ちゃんのおっぱい…すごくやわらかい…）
そして涼は自分もしらないうちに律子の背中に手を回して抱き返していた。そして自分から律子の胸に顔を埋める。

「あははっ…くすぐりたい…んもうかわいいな」

律子がさらに涼の体をぎゅつと抱きしめる。涼の顔は律子のボリウムある胸に押し付けられて、息ができないくらいだった。

「うんぶぶ…りっ…ねえさんくるしいよー」

涼の声で律子をやつと涼を手放す。

「あはは、ごめんごめん」

律子から解放された涼が恥ずかしそうに左手で胸を、右手で股間を隠すような仕草をしながら腰を引いて体をもじもじしていた。

「はっはーん」

その様子を見ていた律子が意味深な笑いを口元で浮かべる。そのまま涼のほうに近づき右手をつかんで強引に手を上げさせる。

「だ、だめえっ！」

涼のパンツの布地がピクピクと震えている。かわいいデザインの下着には似合っていないそのふくらみを律子が驚きの表情で眺めている。しかしそれはすぐに面白そうな玩具を見るような目になる。

最初は酒に酔った勢いでちよつとからかうつもりだったが、涼の膨らんだ下半身を見た瞬間、律子は本気で涼を弄りたくなってしまった。

「へえ…涼…あんた、私のオッパイで興奮したわね…」

「い、いや、これは…」

「いけない子ね。お姉ちゃんとの純粋なスキンシップで興奮するなんて」

「そ、そんなんじやない…よ…」

律子にはやり、と唇の片側だけを上げて、そのまま涼の両肩を掴んで、回

れ右に居間の柱に設置されていた全身鏡のほうに向かわせる。涼は鏡の中に移っている自分の姿を恥ずかしくてまともに見られなくなってしまい、俯いてしまった。

「そんないけない子はお仕置きしなきゃな…」

背後から律子が涼の耳元にささやく。耳元に律子の吐息がかかる。その感触で涼の唇から音が漏れてしまう。

「はっ…はうん…り、律子姉ちゃん…」

律子は右手を涼のパンツの上に乗せる。そしてそのままパンツの膨らみを無造作に摩りはじめた。左手では胸を抱き、逃げられないように涼の体を固定する。

「はうん…」

律子の手が動くたびに涼の体がピクピクと小刻みに震えている。同時に唇からは熱い吐息が漏れている。下半身から感じられる刺激は涼のペニスをさらに充血させる。さっきより大きくなって涼のペニスの先っぽがパンツからはみ出してしまった。

「おや、これは何かな？」

律子がいいたずらっぽく笑い声を浮かべて出した先っぽを指先でつつく。

「あつ…はうん…」

またも、涼の唇から甘い声が漏れる。律子の表情がさらに楽しげな表情に変わった。

「んもう、こんなに大きくして、姉ちゃんにお仕置きされるのがそんなに嬉しいの？涼つとんでもない変態さんだね」

「そ、そんな…」

「私のいとこが変態だなんて、本当信じられないわね…」

律子がわざとらしく、失望したような表情をして見せたが、すぐにまだサディスティックに微笑んでいる。そして、そのままパンツを指でつかんで一気に下ろす。パンツから開放された涼のペニス勢よく飛び出してきた。鏡に映っているその様子を背後から見ていた律子が感嘆の声を上げる。

「あんた、意外とすごいね…」

律子の手が動きその充血しているものを優しく握る。手のひらから感じられる感触を律子が涼にそのまま伝える。

「…すごく、熱いわ」

そしてそのまま手を動かし、包皮をめぐれピンク色をした亀頭が露になる。

「ひゅっ…」

涼は包皮がずり下げられる変な感触に体をまたピクッと震えさせる。

律子の手が上下にゆっくりと動きはじめた。一回…二回…と上下往復の回数が増えるたびに体から力が抜けられるような感覚が全身を襲っていた。それとは裏腹に、ペニスにはさらに硬くなり、熱を持って脈打ちをしていた。先端の鈴口から先走りが漏れ、やがて、律子の細くて白い指に絡まれる。

「おやおや？何が出来るよ？」

「はうっ…はあ…はあ…」

律子がさらにわざとらしく涼にささやく。涼は赤くなった顔でただ切ない声を出していた。

濡れた指先によって先走りの滑りがペニス全体に広がり、律子の手が動くたびにピチャピチャと卑猥な音がしている。

「はうっ…はあ…はあ…」

全身から力が抜けたような感覚で、涼のひざがカタカタと震えていた。今にでも倒れそうになっている。しかし律子はさらに手の動きを早くする。

「あつ…あつ…いい、いく…ダメ…出ちやいそうだよ…律子姉ちゃん…あつ…」

涼はもう射精する寸前だった。快感が恥ずかしさが混ざり合って頭が真っ白になっている。下半身から何か熱いものがこみ上げるような感覚が全身を襲う。

しかし、律子はそこでそのまま動きを止め手を離してしまった。

「あつ…うっ…え…なぜ？」

涼はそこまで言っただけで、そのまま床に倒れこむ。そのまま半泣き声になって律子を見上げる。いまだに青筋を立てて天井を向かっている涼のペニスが空しさにピクピクと小刻みに痙攣している。

その姿をみた律子がわざとらしく両手を広げて肩を落とすような仕草をした。

「…あなたは今自分がなにされるのかわからないの？お仕置きされるのにそんなに気持ちよさそうな表情をしちゃって…それじゃお仕置きにならないじゃない…」

「え…そんな…」

「本当にもう…涼って苛められて喜ぶ変態なわけ？本当にいろんなところで変態だね」

涼の顔に失望の色が浮かんでいた。

「律子姉ちゃん…お願い…イカせて…堪らないの…」

涼は涙めになって律子に哀願する。律子は腕を組んだまま、薄っすらと微笑みを浮かべたまま涼を見下ろしている。しばらくの沈黙の後、律子がやっ

と唇を開いた。

「気持ちよくなりたいの？」

「うん…お願い、律子姉ちゃん…」

「じゃ、条件があるの？」

「条件？」

そこまで言った律子が自分の下着をゆっくりと脱ぎ始める。ブラの下に隠されていた豊かな胸やうっすらと産毛が生えているだけの綺麗なアソコが露になる。完全に裸になった律子が倒れこんだままの涼に近づく。涼はまだ状態を完全に把握しきれず、ぼつとした顔で律子を見上げている。律子はそのままちよつとだけ腰を下ろし涼の顎に指をかけ顔を上げさせる。

「涼、あんたが私を満足させることができたなら、イカせてあげる」

「え…っど、どうすればいいの？」

「そのぐらい自分で考えなさいよ。早くしないと…イカせてあげないからな」

「そ、そんな…」

律子は裸のまま腰に左手を当てたまま涼をからかうような目つきで見下ろしていた。

涼はそんな律子に膝立ちをしたままちよつとずつ近づいていった。やがて涼の顔が律子の股間のワレメに触れそうな距離になっていた。

涼はぼつとした目で律子のアソコを見上げていた。おそろおそろと舌を出し律子のアソコをスジ部分に触れる。

「んっ…」

涼は心配そうな表情で律子を見上げていた。

「り、律子姉ちゃん、このままでかな…」

「うん…いいわ。続けて」

律子の声に涼がそのまま舌でゆっくりと律子のタテスジに沿って上下に舌を這わせる。

「んっ…はあん…」

律子の口から甘い声が漏れた。律子はそのまま自分の手で涼の頭を掴んでさらに自分の股間に近づかせた。

「んっ…ん…いいわ、涼…今度は…舌、入れて…」

涼は夢中に律子のワレメを舐めていた。上下にスジを舐めていた舌を左右に動かせ小陰唇をゆっくりと広げて僅かに中に入れる。

「んっ…」

律子の内股がピクンと痙攣すると、中から愛液が流れ始める。涼の舌にすっぱい味が広がる。



涼は夢中に舌を動かす、律子のアソコの中を舐めまわしていた。中をかき回していた舌が陰核に触れるたびに律子の体が小刻みに震える。

「うん…そこ、いい…もつと舐めて…」

唾液や愛液が混ざりあう卑猥な音、そして律子の興奮した声が混ざり合った音が居間に響き渡っている。

「はっ…ああん…はうっ…涼…上手だね…すごく気持ちいいわ…」

涼は律子のアソコから漏れている愛液の匂いに頭の中が真っ白になって、今自分がなにをしているのかさえよくわからないまま懸命に舌で律子のクリトリスを転がしていた。

「あっ…いいわ…涼…私、いきそう…もつと早く…して…」

律子の全身を快感が襲う。律子の両足がカタカタと震えている、なんとか涼の頭や肩をつかんでふらつく体を支える。

「はっ…いい、いく…いいっ…ああっ…！」

律子が身体が痙攣し、アソコから生暖かい液体がフシュツと噴出され、涼の顔にかかった。

涼の髪をぎゅつと握った律子はしばらく体をブルブルと震えさせ、愛液をアソコから垂れ流す。そして膝がかくんと折れてそのまま前に倒れる。まるで律子が涼を襲うような形になり二人は同時に床へと倒れた。

「はあ…はあ…涼の舌でイッちゃった…すごく気持ちよかったわ…」

「う、うん…」

律子が愛液まみれになった涼の唇に自分の唇を軽く重ねる。そして、そのまま顔のあちこちを汚れを取るように舐めまわす。

「…それじゃさっきの約束、果たさないとね…」

床に手をつけて四つんばいで涼の体の上に乗る。そしてそのまま涼の汚れているメガネを外し、首に唇を当てる。そしてキスはそのまま肩へと移り、胸板へと続いた。

律子が唇が涼の乳首の近くに来てからやつと唇を離す。しかしすぐに舌をぺろっと出して乳首をチロチロと舐め始めた。

「はうん…律子姉ちゃんそこは…」

「…気持ちいいでしょ？」

涼の乳首がピクピクと震えている。涼は初めて感じる変な感覚に襲われてただ体を振るえていた。

「…んっ…男の子も興奮するとここが硬くなるんだね…」

今回は乳首を口に含み、吸いだす。そしてそのまま舌で乳首の先端を刺激する。

「はうっ…律子…姉ちゃん…んっ、はうっ…」

空いている片側の乳首を指で摘んでゴリゴリと転がしながら口での愛撫を続けていた。涼のほうは乳首から全身に流れる快感が下半身に集められてまたペニスが大きく天井を向いて立っている。律子が涼の胸から唇を離す。

「…り、律子姉ちゃん…また…やめちゃうの…？」

涼が切ない声を漏らす。律子はそんな涼にニッコリと微笑んで答えた。

「…そんなことないわ。これからもつと気持ちいいところを弄ってあげるから…ふっ…」

律子の顔がどんどん下におりていく。そして、律子の顔は涼の大きくなったペニスがいる位置まで届いた。さっきの乳首の愛撫によって先走りが漏れて亀頭をぬらししているペニスを見て律子がいやらしい微笑みを浮かべながら涼に告げる。

「…さあて、これから涼をイカせてあげるね…」

そして律子が涼のペニスを口に含む。

「はうっ…うっ…」

口に含んだまま舌で亀頭をチロチロなぞる。

「ああっ…はあっ…あんっ…」

ペニスを刺激されるたびに鈴口から先走りが流れる。律子の口に苦い味が広がる。律子は舌を硬く尖らせてその先走りが出ている鈴口をつつく。

「はうっ…はあん…」

涼が激しく息を切らして甘い声を漏らしている。

「…まるで女の子みたいに喘ぎ声だね…かわいい…」

そう言っただけ、涼のペニスを左手を掴んで先っほを口に含む。そして今度はちゅるつと声を出して吸い上げる。先走りや唾液が吸い取られるネチヨリとした音が響いた。

「んっ…はあ…はあ…」

律子はそのまま頭を動かし上下にピストン運動を始める。

ちゅふ…ちゅふ…

卑猥な水音が響く中、涼も快楽に身を負かして腰をちよつとずつ動かしていた。律子も手を巧みに動かして涼に更なる刺激を与えていた。

涼のペニスが今にも爆発しそうに強張っている。下半身から全身に流れ出さずともわからないまま喘ぎ声を発する。

「うっ…律子姉ちゃん…はうっ…ボク、もう…いい、いきそう…」

「…いいわよ、遠慮なく射精なさい」

律子はそのままピストン運動を続けた。そして、涼のペニスがドクンと大き



く脈を打つ。

「ああああああっ……いく……いっっちゃう……!」

涼がやがて絶頂に達し律子の口の中にそのまま射精した。律子の口から涼の精液が流れ出していた。

「すごい量だね……」

律子が口の中にある精液を手のひらにダラリと垂らしながら涼を見下ろしていた。手の平を近くにいたティッシュで洗ってから律子が疲れ切ったようにもまたも涼の上につつ伏せに倒れこむ。

「はあああ……」

涼のほうも射精を終えた脱力感と疲労に肩を上下させながら大きく息をしている。

「……満足した?」

律子が涼の耳元に小さくささやく。しかし涼は小さく頭を横に振る。

「……また、足りない……もっと……して、律子姉ちゃん……」

そう言っている涼のペニスはまだまだ大きくなっていった。

「……出したばかりなのに……元気ね」

律子が身を起こし、薄っすらと笑いを浮かべたまま涼を見下ろしていた。

「……それじゃ、2回戦始めようか?」

「……うん……」

涼が期待に満ちた目で律子を見上げながら頷いた。律子がゆっくりと顔を下ろして涼に口付けをした。

また、長い夜が続こうとしていた。

そして、次の朝、酒から覚めた律子が涼にいろいろ迷惑をかけることになるが、それはまあ別の話。

—おわり

CUTEG

お久しぶりです。CUTEGです。

冬コミに落ちたせいで、こうしてお久しぶりにお会いします。-(*▽`*)

この間は個人サークルの活動やアイマスDSとかやっていました。

また涼ルートしかクリアしてないんですけどね。

でも、歌は絵理ちゃんのが一番好きです。

声がすごく好きですよ～早く絵理ちゃんのストーリーもクリアsなきゃ。

一人、でがんばってる涼があまりにも可愛すぎるので…イジめる本になっちゃいました。(; _q)

Hypar Pのネーム段階と違って原稿中では泣かしてしまって

涼にはちょっと申しわけなかったりします。

夢子もすごくかわいいですねデザインとかモロに好きすぎます。

百合か百合なのかわからない本になってましたけど楽しんで頂ければうれしいなと思います。

今回は小説の押し絵だけになってましたが、涼と律子のお話も描いて見たいですね。

次はONIGIRIズで出ますけど、CUTEG一人でのやよいちゃんの卒業本を予定しています。

そのあとの予定はまだ未定です。

多分、涼とか美希とか真とか涼とか…だと思えますけど!(?▽?*)!!!!!!!!

あとがきまで読んでくださって本当にありがとうございます。

それではまた会いましょう！

Hyper

こんにちは、Hyparでございます。

新ジャンル、ノーマル百合！ノーマルカップルなのに百合に見えちゃう

まったく新しいジャンルである！…あ、この新ジャンルは無理あるな。

さておき、涼総受け本になってました。

いかがでしたか？こんなにかわいい子が女の子のはずないじゃないかとか叫んでましたか？

そう叫んで頂ければすごくうれしいです。変態という名前の紳士さんです。格好いい！

ONIGIRIズのマンガ本としては初めての男女の絡みだからどうなることやら…

とちょっと心配してましたが、完成してみたらCUTEG先生は今までの本とあんまり変わらない安定したかわいさを見せてくれました。さすがです。

でも涼ちゃんがどう見ても女の子です。本当にありがとう (ry

今回の本はいろいろ新しいことにチャレンジャーしてみました。

ノーマルカップルだったり、小説とマンガのカップリングが違ったり…

ぜひ、皆さんが気に入ってくださるようお願いばかりです。

とりあえず、ONIGIRIズは今年にもいろいろがんばります。ぜひよろしくお願ひします。

それでは、また会いましょう。

おまけ⑥

1/10 ゆめ
ジャンル
大好き!

涼 夢子

最初は
ミーティング
です

でも Hyper さん
ジョー ました
さんて。

奥付

■IM@SWEETS 3 GIRL MEET BOY!

■発行 ONIGIRIズ

■発行者 CUTEG、Hypar

■発行日 2010/02/07

■印刷 DONGBO PRINTING

E-MAIL

Hypar (文) : hypar@hotmail.com

CUTEG (絵) ; yoonji.km@gmail.com

イベントの参加情報などは <http://blog.livedoor.jp/onigiriz> こちらをチェックしてください。

本書のすべてまたは一部を無断に転載・複製・複写することを禁じます。
P2Pやネットサイトへのアップロードは一切禁止しております。

FOR ADULT ONLY

30-0631209
IM@SWEETS
STRAWBERRY
3
711-7775-
0400052418 3000013



Girl
meet
BOY!

Im@sweets 3
ONIGIRI ㄨ